



ありあけ

●発行日 2013年1月1日
●編集 会報編集委員会

●発行 佐賀大学農学部同窓会
住所 佐賀市本庄町1 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253 FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ http://dousou.saga-u.ac.jp/



農学部同窓会の今年度の重点取組み(組織充実)へご協力を

農学部同窓会 副会長 川副 操

会員の皆様、あけましておめでとう御座います。平成25年の希望に満ちた、輝かしい新春をお迎えのことと思います。

私、昨年同窓会の役員に選任されましたものの、会務の何たるかも判らず今日に至っています。皆様方のご協力の程をよろしく願います。

平成24年度の第27回総会において、

- ① 同窓会支部の体制・活動をより充実すると共に、会誌発行等による各種情報提供
 - ② 大学〔農学部〕と同窓会の意見交換会を開催するなど相互連携への取り組み
 - ③ 準会員である在学生への支援
 - ④ 大学が全国に先駆けて取り組む農業技術経営管理士(農業版MOT)養成への協力支援
- 等が今年度の重点事業計画として承認されました。

いずれの事項も、学部発足以降6800余名を数える同窓生の「情報交換」、「心のよりどころ」として、又これから巣立ってくる後輩学生への「人材育成支援」、「人生のアドバイザー」として、同窓会が身近な組織となっていくためには重要な事業と考えます。

このため、まずは同窓会組織拡充策として大学の

お膝元、佐賀県内に在住・または勤務されている同窓生に呼びかけを行っています。現在、県内には5支部(県庁・農協連・教職員・農業自営者の会・県〔退職者〕)が組織化され、それぞれ支部長さんのもと総会、懇親会、情報交換など積極的に活動されていますが、いまだこれらの支部に属されていない方が、約300名いらっしゃいます。今後これらの方に対して

- ① 既にご退職・退官されたと考えられる方
- ② 自営者の方
- ③ 県内在住で県外教職員など
- ④ そのほか県内企業・行政にお勤めの方

等それぞれの支部長さん共々同窓会加入を呼びかけてまいります。事務局と共に世話をして頂く方の存在が重要と考えます。この佐賀県内の組織充実がその他地域の組織活性化へ通ずるもので、いずれにしても、これまでの経緯等考えても、皆様方の協力なしでは難しい面もありますのでよろしくお願い致します。

最後に、先の10号でも金丸会長がお願いしました、大学美術館建設の募金活動につきまして、皆様方の温かいご支援を頂いているところですが、まだ農学部が目標とする金額には至っていない状況ですので、皆様には出費多端の折に申し訳ありませんがよろしくお願い致します。(S44年卒・土改)

会報編集方針とホームページ運用規定

農学部同窓生(在校生を含む)は約6,700名の交流誌として、従来の2年ごとの同窓会誌から年2回の会報「ありあけ」(2007年6月創刊)に生まれ変わって5年目になりました。絆を目的とする会報の主旨からこれまでは全員に配布していましたが、会費納入の低迷などから会費納入者のみへの配布としています。

また、多くの会員諸氏からの近況報告を取り上げる為に、必要的確な本文と写真を主体とする紙面とし、割愛した分は「佐賀大学同窓会ホームページ・農学部同窓会・同窓生の広場」に全文掲載する事に

しています。ただし、全学同窓会ホームページの容量制約などのために、現在新たな運用法が検討されていますが、誰でも閲覧できますのでご利用ください。

農学部同窓会「同窓生の広場」の投稿規定(暫定)は下記のとおりです。

農学部同窓会「同窓生の広場」運用規定(暫定)

1. 農学部同窓会の「同窓生の広場」は、会員から寄せられた情報などを随時掲載する。
2. 会員は電子メール、FAX、郵送などで原稿を同窓会事務局へ届ける。
3. 掲載に当たっては、会報編集委員が内容を検討し、会長、副会長、理事長、編集委員長の合議で掲載の可否を決定する。

4. 掲載原稿の編集は編集委員が、ホームページへの掲載は同窓会事務局が担当する。

この暫定措置は、平成24年7月1日から施行する。
(文責 編集委員長 村岡 実)

農学部の動き

佐賀大学公開シンポジウム

有馬 進 (生物環境科学科・資源循環生産学・教授 S52卒・農経)

平成24年9月29日、公開シンポジウム「東アジアと唐津の農地保全を考える」が唐津市市民会館で開催された。同シンポは、佐賀大学農学部が取り組んでいる「環黄海環境保全プロジェクト」の成果発表を兼ねており、農学部生物環境科学科の田中宗浩先生による「中国江蘇省における豚糞尿液肥利用の試み」、同学科・長裕幸先生による「乾燥地農業は人類を救う」、同学科・原口智和先生による「唐津市の農業と水環境」、鳥取大学・井上光弘先生による「土壌の塩類化の現状と除塩技術」の講演がなされた。いずれの話題も、農業の基盤となる農地の永続的使用を可能にするために、耕地生態や資源循環などを長いスパンで捉えたものであり、農地管理についての示唆に富んだ内容であった。

同シンポは、平成5年に東唐津に設けられた海浜台地生物環境研究センターが廃止され、農学部附属「アグリ創生教育研究センター」(唐津キャンパス)として10月1日に再出発することを記念した催しであった。そのために、新センターの開設に期待を寄せる坂井俊之・唐津市長をはじめとして100名近くの市民や学生が参加した。

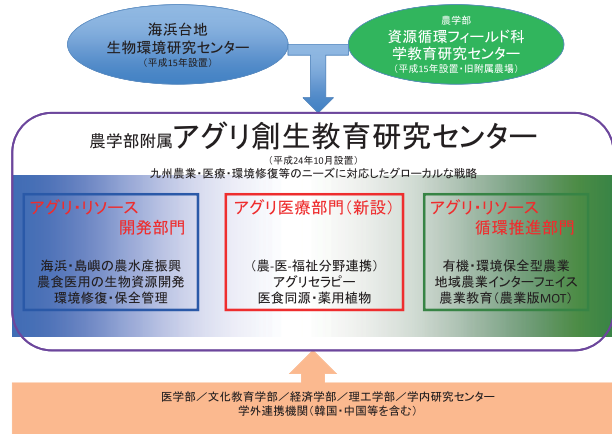
同日、海浜台地生物環境研究センターとして最後の取り組みとなった「環境セミナー：農業は環境を守るのか、それとも破壊するのか」が、同センターの鄭紹輝先生により開催され、佐賀県内の5つの高校から集まった20名の生徒が熱心に聞き入った。



「アグリ創生教育研究センター」誕生

有馬 進 (生物環境科学科・資源循環生産学・教授 S52卒・農経)

農学部附属「アグリ創生教育研究センター」が、平成24年10月1日に開設された。この新しいセンターは、唐津市東唐津の海浜台地生物環境研究センター(平成15年設置)と佐賀市久保泉の資源循環フィールド科学教育研究センター(平成15年設置：旧附属農場)を組織統合したもので、2つの既存施設がそれぞれ、久保泉キャンパス(新センター本部)ならびに唐津キャンパスと転身した。新センターの研究組織としては、農水産業振興のための地域資源を活用・開発する「アグリ・リソース開発部門」、環境保全型農業を推進する「アグリ・リソース循環推進部門」及び、農業がもつセラピー・リハビリ効果を医療に活かす「アグリ医療部門」の3部門が設けられた(図参照)。アグリ医療部門は、社会的ニーズが急増している新たな学際的分野である。これらの新たな教育研究活動を展開するために、医学部や文化教育学部などからの分厚い協力支援体制を整えられている。一方、旧附属農場の時代から担ってきた農業教育は、新センターでも主要な業務であり、従来の農業技術教育に加えて、高度な農業管理技術者の育成(農業版MOT)事業も組み込まれた。センターの陣容は、専任教員8名、技術員5名、事務職員4名である。組織としては、センター長(併任)の下に、各キャンパスを統括する副センター長(併任)2名を置き、双方のキャンパスに4名ずつの専任教員が配置された。農学部の附属研究施設としては、これまでにない規模である。佐賀大学としては、センターの名称通り、農学が核になった複合研究の中で創生される成果に大きな期待を寄せている。



農学部研究室紹介 その⑧ 生物環境科学科

生物環境保全学コース 生物環境学分野

植物環境調節学研究室 井上 興一 教授

環境分析化学研究室 上野 大介 講師

資源循環生産学コース 資源循環生物学分野

土壌微生物学研究室 染谷 孝 教授

私たちの分野は、旧農芸化学科土壌肥料学講座に由来します。のちに学部改組に伴い、応用生物科学科生物調節学講座土壌環境学分野（土壌学研究室、植物栄養学研究室）となり、さらに現在の形になりました。分野の名称だけでは何の研究室か分かりにくいのは時代の趨勢ですが、中身は「21世紀に相応しく発展した土壌肥料学」です。

井上興一教授は九州大学農学部出身で、2001年8月に広島県立大学生物資源学部から着任しました。有機・無機廃棄物の土壌還元などによる資源化および機能性強化農産物生産のための栽培環境制御手法の開発などに携わっており、農産物への微量成分の導入による生産地特定マーカーの開発や蛭殻を原料とする吸着剤による重金属汚染土壌の安全化などを手がけています。

上野大介講師は北海道東海大学工学部、愛媛大学大学院農学研究科出身で、2005年4月にカナダ環境省水圏研究所（ポスドク）から着任しました。人工化学物質による生物環境・食料生産環境の汚染メカニズムを解明するとともに、環境に配慮した化学物質利用法の提案がテーマで、シックスクールの原因物質や母乳中の汚染物質の解明、東北被災地の汚染物質調査などに忙しい毎日です。

染谷 孝教授は東京教育大学農学部、東北大学大学院農学研究科出身で、1994年7月に産業医科大学医療技術短期大学から助教授として着任しました。土壌、堆肥及び環境中の微生物の生態解明とそれらを応用した土壌・水圏環境の保全や浄化・修復、有機廃棄物の堆肥化やメ

タン発酵などによる資源化、堆肥の衛生管理などをテーマとし、特に蛍光染色による微生物の可視化・定量が得意です。近ごろは「野菜や堆肥の衛生管理の専門家」としてマスコミにも露出が多くなってきました。

現在は二つのコースの二つの分野に分かれています。今でもとても親密に協力・連携しています。春の新入生歓迎会や夏の研修合宿は3研究室合同で開催され、井上研と上野研はゼミも合同で行っています。研究面でも連携することが多く、農水省のプロジェクト（2007～2009年度新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業）では、井上研で栽培試験、染谷研で微生物分析、上野研で微量化学分析をそれぞれ分担し、大きな成果を上げました。国際共同研究や企業との共同研究でも、三研究室の連携が発揮されています。

スタッフは教員3名の他に事務員1名、研究員1名、博士課程2名（うち留学生1名）、修士8名、卒論生9名、3年生7名、2年生4名、計35名の大所帯です。卒業生は、農林水産、環境、医薬、教育など多岐にわたる分野の企業や公務員として活躍しています。近ごろは研究員（博士過程修了生）が学会の論文賞を受賞したことがトピックスです。

Ryuda, Noriko, Tomoyoshi Hashimoto, Daisuke Ueno, Koichi Inoue, and Takashi Someya (2011): Visualization and direct counting of individual denitrifying bacterial cells in soil by nirK-targeted direct in situ PCR. *Microbes Environ.* 26: (1) 74-80. (日本微生物生態学会2012年度論文賞受賞)

(文責：染谷 孝)





研究はアカデミックで エレガント

柳田 晃良 (佐賀大学名誉教授)

ヒトの歴史は食物を抜きにしては語れない。食物は体成分、エネルギーを確保し、生命を維持するための道具であり、しかも食は我々の楽しみでもある。日本人の平均寿命を80年とするとある統計では生涯に摂取する食材は約80トンに及ぶ。先進国の人々はこれまでの歴史の中で経験したことのない濃厚な食生活をしており、いわば飽食の時代と戦っている。現在、飽食がもたらす心疾患、糖尿病、ガンなどの生活習慣病の増加は深刻化している。飢餓に苦しんだ祖先はエネルギーを保存する方法として「節約遺伝子」を獲得して飢餓に備えたが、しかし過剰エネルギーを代謝する「すべ」を十分獲得しておらず、肥満を基盤とするメタボリックシンドロームの増大に直面している。メタボリックシンドロームは脳や心臓の血管障害、動脈硬化症などの重篤な疾病の基盤となる。現在のメタボ検診基準では日本人40歳以上男性の半数が該当する。人々の英知は、当然のことながら健康維持や病気の予防・改善に対処する機能性食品や薬剤の研究に向けられている。

食品には、栄養機能、味覚などの感覚機能だけでなく、第3次機能として生体調節機能がありその利用をめざした研究が盛んである。最近の研究では我々の想像以上に食事や生活習慣の改善が疾病予防・改善にも役立つことが明らかになっている。生活習慣病の予防・改善は個人の Quality of Life のみならず医療費（年間約30兆円）の軽減に大きく寄与する。

私の食品栄養化学研究は40年を過ぎようとしている。主な研究テーマは、(1)食品成分による脂質代謝調節、(2)肝臓でのリポ蛋白質合成・分泌機序、(3)機能性脂質・構造脂質のメタボ予防・改善作用、(4)生体膜リン脂質の代謝調節に関する研究である。本講演では、はじめに最近の機能性脂質に関する研究を紹介し、次に食品機能性成分がメタボリックシンドロームの危険因子である脂質代謝異常や肥満への影響について紹介する。

食事脂質は多様な生理機能をもち生命活動にとって重要な成分であるが、近年のメタボリックシンドローム増加の一端に食事脂質の過剰摂取や質に責任があることが示唆されている。そのため、疾患予防・改善を考慮した機能性脂質の開発が望まれている。我々の食事脂質の多くはトリアシルグリセロールだ

が、リン脂質も3-8%含有している。それらリン脂質にはトリアシルグリセロールとは一部異なる有益な栄養生理機能が知られている。例えば、ホスファチジルコリンの脂肪肝予防作用やホスファチジルイノシトールによる善玉ホルモンアディポネクチン増加を介した抗炎症作用や高血圧抑制作用が明らかにされている。また、乳製品に含まれる共役リノール酸異性体や植物油の共役型脂肪酸の抗肥満作用や抗炎症作用も見いだされている。多価不飽和脂肪酸含有リン脂質のメタボリックシンドローム予防・改善作用も顕著である。

また、我々の身近な食品成分がメタボリックシンドローム予防・改善作用に関与していることが多くの研究で明らかになっている。九州は日本の農産物・食糧供給基地であり、とくに佐賀のタマネギ、ノリ、お茶、大豆、ミカン、レンコン、アスパラや鶏肉などは全国有数の位置を占めており、それらの栄養生理機能と責任成分の研究が活発に行われている。我々はタマネギに含まれる環状含硫化合物シクロアリンが肝臓でのアポリポ蛋白質B100含有リポ蛋白質(VLDL)の合成・分泌に必須なミクロソーム脂質転送タンパク質を(MTP)を阻害してリポ蛋白質(VLDL)の合成・分泌を抑制し、高脂血症を改善することを世界に先駆けて報告している。さらに、食品成分の糖・脂質代謝や肥満に関わる酵素・遺伝子発現への影響など分子栄養学的な情報も発信している。

秦の始皇帝の命に従い不老長寿をもたらす食物を探し求めた「徐福伝説」が佐賀に残されている。私も徐福にならって今後も現代版不老長寿の食物を捜していくことにする。折しも、2011年春にはJST支援のもとに地域の企業者、大学および公設施設の研究者が結集し、「さが機能性・健康食品研究開発共同研究拠点」通称「徐福フロンティアラボ」が設立され、地域の食材を利用した研究プロジェクトがスタートしている。機能性・健康食品の研究を通じて、人々のQOLの維持に役立てる安全で健全な食品を提供に寄与することが我々食糧科学者の使命であろう。(2012. 3. 16 記)

なお、本文は平成24年3月に佐賀大学をご退職された農学部生命機能科学科 柳田晃良先生の「最終講義」概要として頂いていましたが、紙面の都合で今回掲載させて頂きました。現在は西九州大学健康福祉学部健康栄養学科教授および永原学園国際交流委員長を務められており、研究と教育にご活躍です。

会員の広場



アリゾナ留学雑感

宮本 英輝

(生物環境科学科・環境地盤学分野・
准教授、H10年卒、農業水理学)

心地よい初夏の風が佐賀平野を吹き抜ける頃、南アリゾナは夏本番を迎える。日中の気温は45℃に迫り、地平線まで続くアスファルトは熱でひび割れる。湿度は一桁に低下するため、息をするたびに喉が渇く。それでも、「今日はマイルドな方だ」と、この地に永く住む知人は笑顔で話す。そんな灼熱の地に位置するアリゾナ大学で、約10ヶ月の研究生活を始めた。アリゾナ大学との共同研究が軌道にのった頃、同窓会から留学記の執筆依頼を頂戴した。パソコンの前に座り、どのようなことを書くか思案した。吐き出したい有象無象がないわけではないが、同窓会報には不向きなものばかりである。悩んだ末に、日本人留学生が抱える就職にまつわる悩みを紹介することとする。

ご存知のように、我が国の大学は評価・競争の時代に突入し、教育研究を取り巻く環境は大きく変貌した。この間に学生の気質も大きく変化し、いわゆる“内向的な学生”が急増していることは、皆様も感じるところであろう。そのせいか、海外で学びたいと思う学生は、特に男子学生を中心に激減している。米国への留学生数が2000年代初頭をピークに漸減しているのに対して、韓国・中国出身の留学生は増加の一途をたどっていることから、日本人の元気のなさが際立つ。

しかし、自ら道を切り開く野心的な日本人留学生がいるのも事実である。そうした若者をアリゾナ大学キャンパス内で見かけると、つい話し込んでしまう。郷土・祖国に対する熱い想いを胸に、いずれ祖国で活躍することを夢見て異国で勉学に精進する彼らなら、さぞや将来も順風満帆だろうと思いきや、必ずしもそうではないという。その理由は、就職の難しさにあるという。時期を逸したり、大手就職斡旋会社が敷いた所定のレールを逸れたりすると就職しづらくなる日本特有の就職活動文化や、採用した留学経験者を上手く活用す

ることができない企業が少なからずあることが、彼らにとって大きな不安要素になっている。さらに、現地採用を行う日系企業への就職は別として、太平洋をまたいで就職活動を行うのは経済的にも難しい。

インターネットを利用した就職活動が全盛期の今、インターネット上では様々な情報が飛び交っている。ある留学経験者の就職にまつわる失敗談・挫折体験がインターネットを介して誇張されて拡散し、“留学=就職できない”といった偏った先入観が若者の間で定着しつつある。そうした先入観に囚われると、リスクばかりが気にかかり、留学の醍醐味については目もくれなくなるのである。留学に対する“負のイメージ”が、先述の留学生数減少に拍車をかけているのであろう。

今や、チャンスとみられなくなりつつある留学。しかし、多様な価値観の中で研鑽を積んだ人材がもたらす新たな息吹は、我が国を覆う閉塞感を打破するうえで必要であることは、誰も否定しないであろう。にもかかわらず、そうした若手人材を国内で生かすことが十分に出来ていないとしたら、そんな勿体ない話はない。「最近の若者は、どうも内向的で…」と嘆く前に、異国で学ぶ若者が我が国で活躍できるよう、就職活動の仕組みや人材活用のあり方を考え直すのではないか。

「昔は、南アリゾナにもたくさんの日本人留学生がいたんだけどねえ…」と悲しげに語った、ある日系人夫婦の言葉が耳に残る。近い将来、そんな状況が一変するよう今後の佐大生の奮起に期待し、個人レベルでも若者の留学支援を行いたいと考える今日この頃である。



アリゾナ大学の正門にて



南通学院便り その1

金丸 安隆

(農学部同窓会 会長、S43年卒・畜産)

いろいろ事情があって10月20日に佐賀空港から家族や知人に見送られて出発し、上海空港では日本語科主任の張先生と学生が迎えてくれました。

張先生の車で上海の都心を迂回した高速道路を走り、長江の一番下に架かっている虹橋大橋という長い長い白い橋を、一路江蘇省の南通市に向かいました。約200kmを2時間と少しで学院に到着しました。

学院の名前は南通農業・職業技術学院といい、高校卒業生が3年間学ぶ大学です。学生数は8000人、佐賀大学より2000人多いです。7学科あり、日本語科は人文系の中の一つです。この近くには総合大学の南通大学、職業大学、紡織学院などの大学があり学生の街といえます。登校時間帯には道路を洪水のように学生が流れていきます。

やっと1ヶ月になろうとしています。やはり来てみると外国に違いない。久しぶりに中国人の生活に接したようで、ワイワイガヤガヤと屈託がなく朗らかで。姿・形も同じだから親しみを感じるし、野菜や果物類もほぼ同じものが売られているから違和感はない。5、7年前に比べるといろいろな車が多くなり、高層マンションが多くなっている。



スクラップアンドビルドがまだまだ続いている。自

スクラップアンドビルドがまだまだ続いている。自



家用車の車が多くなっているため、道路や住宅の周辺にも車ばかり止まっている。中国の特長である4～8車線の車道と片側5mの自転車道と4mの歩道と広い広い道路だ。電気バイクが音もなく後ろから来るのが一番怖い。夜もライトをつけないバイクが多い。

10月22日から私の授業が始まりました。1週14時間の授業担当、2時間連続だから週7コマです。日本語科だから女子がほとんど。男子は数名で不真面目。日本語科へ希望する生徒が年々少なくなっているそうです。理由はいろいろ。3年生は40名ですが1年生は20名以下です。や



やはり「顧衛兵」という副学院長の知人ということもあってか、担当の職員も親切で、受け入れ準備や対応も良くしてもらっています。

私の住む住宅は6階建ての外観は古いですが、一度内装をし直したと見えてとてもきれいです。3LDKに相当するのでしょうか。やっと荷物の整理もついて、自炊用具もそろいましたが、後かたづけなどに手間がかかり、やはり学生食堂での食事が中心となっています。時間に余裕ができれば自炊と外食が半々になるでしょう。

学生はもちろんのこと先生達も若いから私のような老人は見あたらない。私は老人であることを忘れていたようです。

佐賀も紅葉の季節でしょう。皆様のご健康とご多幸をお祈りします。

(2012. 11. 15)

スカイツリー探訪雑感

平山 伸

(S60年卒・生物化学)

2012年5月22日に東京スカイツリーがオープンし、首都圏の新たな観光拠点として注目されている。夜間の照明は「心意気の“粋”」と「美意識の“雅”」の2つのパターンが用意され江戸情緒を醸し出している。東京ソラマチのショッピングゾーンに加え、すみだ水族館が隣接し、多様な楽しみ方ができる空間となっている。オープン前には押上駅という、下町のごくありふれた小さな駅であったが、オープンして正に劇的に変わった事例といえよう。

また、地盤が弱い東京の下町に634mもの高層物が建ったことは、最新の免震装置等の技術が寄与していることも忘れてはならない。更に、老舗の東京タワーは先の震災による先端湾曲部分の改修工事が開始されスカイツリー効果も重なって再注目されている。それに加え、全国的にはあまり著名ではない横浜マリンタワーも地元では再認識されつつある。このように展望施設には人を魅了する大きな集客効



果があることを改めて示された形になっている。

一方、佐賀に目を転じると、中心街の空洞化が激しくなっており、その対応策として街中コンサート、コンテナショップ、サガン鳥栖のアンテナショップやパブリックビューイング等、様々な取組みがなされているが、展望施設や水族館等の誘致も視野に入れてはと感じる。

また、より現実的で投資が少ない集客施設として鉄道ジオラマがある。2012年7月7日の日経新聞によると横浜駅徒歩5分の場所に“原鉄道模型博物館がオープンし、その目玉として100坪で世界最大級と云われる鉄道ジオラマが完成し、土日祝日には多くの人で賑わいをみせており、年間20万人の集客を狙っているとのことである。幸い佐賀市白山には西日本最大級と云われている鉄道ジオラマがあり、これらの活用を参考に佐賀に適した集客戦略を構築してはと考えるものである。

スカイツリーは、軟弱地盤に最新の技術を投入することで成立した事例で、低平地である佐賀での建築課題と共通項が多いものと推測される。このように技術の下支えの元、鳥のように天空から見下ろしたいという人の欲求を満たし多くの人に感動を与え、それらが地域活性化に繋がった事例であるが、この光景を見て上記の雑感を巡らせた次第である。いずれにせよスカイツリーという感動を与えるモノに接することで新たな連想が出てくる旅に似た感動や感覚を覚えることができた。皆さんもスカイツリーや東京タワー等を訪れて感動を体験されては如何でしょうか。

佐古宣道先生を囲む会

稲田 稔 (S63年卒・病理)

平成24年4月29日に皇居において、平成24年春の叙勲の授賞式が開催され、私たちの恩師である佐古宣道先生が瑞宝中綬章を受章されました。先生は昭和46年から佐賀大学において、植物病理学、特にウイルス病分野での研究教育に従事され、また、平成6年からは農学部長、平成8年からは佐賀大学学長として、大学の運営と発展に力を尽くされました。このような先生の長年にわたる功績が高く評価され、この度の受章につながったものと存じます。

そこで、受章をお祝いするとともに、先生の今後尚一層のご健康を祈念するため、8月18日に佐賀市のホテルニューオータニ佐賀において、「佐古宣道先生を囲む会」を研究室卒業生並



びに関係者合計43名の参加のもとで開催しました。会では先生が受章時のエピソードを、また、参加者からは自身の近況や学生時代の先生との思い出などが紹介され、学生の頃に戻り楽しい時間を過ごしました。最後は、田中欽二先生の音頭により、佐古先生のご健康と佐賀大学の発展を祈念し、参加者全員の万歳三唱で締めくくりました。

なお、参加者および今回参加できなかった卒業生からお預かりした記念品料については、先生のご希望により、佐賀大学美術館設置事業募金への寄附にあてていただくことになりました。

支部 だより

熊本県支部

熊本県庁佐賀大学農学部同窓会の平成24年度総会を、平成24年8月3日に「ホテル日航熊本」で開催しました。

総会には会員25名の他、佐賀大学農学部同窓会本部から金丸康隆会長と有馬進副会長に駆けつけていただきました。

また、今年度は熊本県庁楠葉会（商工観光労働部 高口義幸氏 S53・経済学部）、農業高校同窓会（阿蘇中央高校副校長 森山大介氏 S58・作物）、JA 関係同窓会（JA 教育研修センター所長 尾崎義春氏 S56・作物）からも代表者に御出席いただき、それ

ぞれの活動状況報告の後、お互いの連携強化を申し合わせました。

総会の後は、大田黒慎一氏（昭和50年卒・果樹）の勇退者激励会に移り、大いに盛り上がり熊本の暑い夜にとけ込んで行きました。

立場 久雄 (S51年卒・作物)



佐賀県庁支部の総会開催

佐賀県庁支部では、9月6日(木)に佐賀市内「グランデはがくれ」において、会員36名が参加し、平成24年度の総会を開催しました。総会では、森田昭支部長（S52年卒・農経）の挨拶のあと、平成23年度の事業実績や24年度の事業計画について協議しまし

た。

また、来賓として、農学部同窓会の川副操副会長（S44年卒・土改）にご出席いただき、農学部同窓会の活動状況や美術館建設事業に対する寄付のお願いなどについて、御挨拶を頂きました。

今年は、2年毎の役員改選期に当たり、支部長を溝口善紀（S53年卒・病理）が引き受けることにな

りました。新役員一体となって、総会や先輩を送る会への参加者を増やし、会員相互の親睦交流を更に深めていきたいと思っています。

新入会員として、今年4月に入庁した後藤有華さん(園芸課)、成富毅誌さん(農業技術防除センター)、野村幸代さん(杵島農業改良普及センター)、馬場加奈絵さん(東松浦農業改良普及センター)、古賀晴香さん(藤津農業改良普及センター)の5名が入会し、しっかりした口調で自己紹介をされました。現時点での、佐賀県庁支部の会員数は、220名です。

懇親会では、豪華景品がもれなく当たるお楽しみ抽選会の開催など、大いに盛り上がり楽しいひとときを過ごしました。



溝口 善紀 (佐賀県庁支部長、S53卒・病理)

■ 農学部と同窓会の近況 ■

・第1回 佐賀大学ホームカミングデー

「第1回 佐賀大学ホームカミングデー・母校へ里帰りください」が、昭和46年、56年、平成3年に卒業した全学部の佐賀県内在住者を招待して、平成24年10月28日、本学本庄キャンパス理工学部6号館1階大講義室で開催された。

卒業生・大学関係者約100名が集い、佐賀大学の現状と展望が中島副学長からなされ、その後は懇談の有意義な一時でした。

次回は全国在住者を対象に、多くの同窓生が参加する会になることを期待しています。

・就職ガイダンス

平成24年11月28日、農学部在学の同窓生(学生会員)を対象に、JA福岡中央会 小野義憲(S57卒・農経)氏、伊藤ハムウエスト(株) 長野沙織(H22卒・生化学)氏、山崎製パン(株) 向井賢吾(H21卒・応用微生物)氏、福岡県嘉麻市役所 辻田あずさ(H9卒・農業水利)氏、JAさが堤繁文(S60卒・育種)氏、熊谷とも子(H24卒・生化学)氏による職場の現状と就職に際しての懇切丁寧なガイダンスが為されました。講師の中には自らの職場の商品を持参・配布されて、学生はそのアドバイスと手土産に大変感動したとのことでした。次年度のガイダンス担当の同窓生、後輩の為によりしくお願いいたします。

・キャリアデザイン

平成24年度の「キャリアデザイン講座」(佐賀大学主催、全学及び各学部同窓会協賛、全学部学生対象)の内、農学部関係は平成24年12月19日に永田洋一郎(S53年卒・農経、鹿児島県南さつま市役所勤務)氏、平成25年1月9日に野口千明(H21卒・応用生物、祐徳薬品工業(株))氏を講師に開催されます。

・農学部と同窓会の意見交換会

平成24年12月4日、佐賀市の「ホテルニューオータニ佐賀」で、農学部からは藤田修二学部長、和田康彦、井上興一副学部長、野間口眞太郎、長祐幸、渡辺啓一各学科長のご出席を賜り、同窓会からは川副操、有馬進、光武司副会長、松永章理事長、村岡実会報編集長、坂本隆昭(佐賀県支部長)、山田和由(農業自営者の会長)、田中治(佐賀県農協連支部長)、大坪正幸(教職員支部副支部長)、溝口善紀(佐賀県庁支部長)が参加して、農学部の現状と同窓生の当面する課題について、有意義な意見交換が為されました。

なお、これらの詳細は会報12号(平成25年7月1日発行)と農学部同窓会ホームページで取り上げます。

村岡 実(S46卒・植物保護)

佐賀の風景



2012佐賀インターナショナル バルーンフェスタ

今回で33回目となる「2012佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」が10月31日から11月4日まで、佐賀市の嘉瀬川河川敷をメイン会場として開催された。

このフェスタには国内外から約100機の熱気球が参加するアジア最大規模で、今年も期間中の来場者は約80万人（佐賀県の現在の人口に相当）、今や晩秋の空を彩る佐賀の風物詩となっている。

このフェスタには佐賀大学熱気球部（学生サークル）をはじめ、佐賀大学農学部、他学部の卒業生も数多く選手、役員として参加している。来年もこの時期に開催される予定、詳しくはインターネットの「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」などでご確認ください。

なお、掲載の写真は2012年11月2～3日に外尾弘文（H2年卒・応用動物）氏が撮影したものです。

村岡 実（S46卒・植物保護）



編集後記

平成25年の新年をお元気でお過ごしのことと存じます。会報「ありあけ」は、同窓生との交流を目的に1月、7月に発行しています。これまでは、農学部同窓生（在学生を含め）約6800名に郵送していましたが、予算の関係上会費納入者のみとしました。た

だし、3年ごとの所在確認時には従来とおり全員に配布します。

今回の会報に玉稿・写真を賜った方々へお礼申し上げますと共に、「会報編集方針とホームページ運用規定」のとおり、多くの同窓生からの寄稿をお願いいたします。

（編集担当 記）